

氏名	安田 大典
学位の種類	博士 (応用情報科学)
学位記番号	博情第 26 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 (課程博士)
論文題目	作業療法士養成校の臨床実習における情意領域に関する研究 ーネットワークによるサポートシステムの構築に向けてー
論文審査委員	(主査) 教授 水野(松本) 由子 (副査) 教授 東 ますみ (副査) 准教授 竹村 匡正

## 学位論文の要旨

作業療法士養成における臨床実習では、成績評価表に挙げている情意領域の項目以外にも学生に求めることが多いが、具体的な行動目標が少なく、学生は何を求められ、何を改善していけばよいのかが明確ではない。臨床実習での教育評価と指導は実習指導者の力量と経験に委ねられており、学生は時に学生の持っているレベルより高いレベルを要求され精神的に不安定になりリタイアすることもある。また、実習指導者の意図が学生に伝わらず、ハラスメントとして捉えられることもある。どのような指導方法が効果的なのかということは、養成校の教員、実習指導者、学生にとって重要な課題である。さらに、実習中は実習地が遠隔地の場合も養成校に近い場合も、学生は直面する問題や困難を実習指導者に相談するか、あるいは自分ひとりで解決しなければならない。積極的な学生の場合には、問題解決を比較的容易に行うことが可能であるが、消極的な学生の場合には問題発見が遅れたり、ひとりで悩んでしまい、解決策が見出せない可能性がある。そこで、本研究では、作業療法士養成校における臨床教育の問題点を改善する目的で、学生の情意領域に関する自己評価表を作成した。さらに、臨床実習中の学生の情意領域を把握する目的で、自己評価表を用いたネットワークによる自己評価システムを開発した。今回の目的を達成するために以下の 6 段階で本研究を行なった。

第 1 段階では、日本医学教育学会監修・臨床教育マニュアルを参考にして自己評価表を作成した。評価項目は、A 群は患者と接する姿勢に関して 31 項目、B 群は患者について考える姿勢に関して 9 項目、C 群は患者を守る姿勢に関して 17 項目、D 群は熱意と誠実さに関して 13 項目の全 70 項目とした。実施方法は 70 項目に対して重要度、遂行度、満足度を 1 点～10 点の 10 点法で採点させた。自己評価の実施は、臨床実習 I 期目の直前、中間、終了後、および、II 期目の臨床実習の中間、終了後の 5 回実施した。その結果、5 回目の重要度、遂行度、満足度が有意に高値を示した。また、満足度の高い上位 25 項目は挨拶や身だしなみ、言葉遣いに関する項目で、中等度 25 項目は患者

への話し方、話の聞き方に関する項目で、下位 20 項目は主に仕事に対する熱意や誠実さといった自己の内面に関する項目であった。

第 2 段階では、学内の授業で情意領域を高める目的でグループ学習を行なった。グループ学習が情意領域に及ぼす効果をみる目的で自己評価を用いた。本研究で使用した自己評価は、第 1 段階で、満足度が低値を示した下位 10 項目、中等度の 2 項目、高値を示した上位 1 項目を用い作成した。その結果、「責任を持って与えられた課題を行う」「知識の向上に努める」「積極的に指導を求める」などの項目は最終的に高い満足度を示した。

第 3 段階では、臨床実習期間内で情意領域を改善出来る項目や、困難であろう項目を明確にするために、70 項目からなる自己評価表を実習前後に実施した。その結果、62 項目で有意な差を認めた。その内、実習期間内では改善困難な項目は 7 項目であり、改善可能な項目は 23 項目であった。実習当初から良いと評価し、実習後も良いと評価した項目は 40 項目であった。

第 4 段階では、情意領域に関する 70 項目からなる自己評価を実施し、情意領域の因子構造を明らかにするために因子分析を実施するとともに、実習前後での学生の意識の変化を検討した。その結果、実習前後ともに 8 因子を抽出した。実習前と実習後の 8 因子を比較した結果、「倫理観」「連携」「守秘義務」「身だしなみ」「マナー」の 5 因子は共通であった。一方、実習後に変化した 3 因子は、実習前が「配慮」「傾聴」「挨拶」であった因子から、実習後には「言葉遣い」「誠実性」「洞察力」と変化した。因子分析を行うことで、臨床実習における情意領域の主な要素と自己評価表の項目の関係性を抽出し、明確にすることができた。

第 5 段階では、臨床実習が学生の情意領域に与える要因を分析することを目的とした。方法は、実習前後に気分プロフィール検査 (Profile of Mood States : POMS) 短縮版と自己評価表を実施した。その結果、実習前後ともに POMS の「混乱」が最も高値を示した。実習前後の比較では、実習後の「緊張・不安」と「怒り・敵意」が実習前と比較して有意に低値を示した。学生の情動に影響を与える要因の一つとして、「配慮」「傾聴」などの対象者 (病院の患者や施設の利用者を以下、対象者とする。) と直接対応する対人関係に関する項目が考えられた。

第 6 段階では、実習中の学生の状況を把握する目的に、インターネットを介した自己評価システムを開発し、実習中に自己評価を実施した。その結果、すべての因子で実習前、実習中、実習後での有意な差は認めなかった。学生は実習全般を通して「倫理観」「挨拶」「守秘義務」「身だしなみ」「マナー」は良いと自己評価し、「配慮」「連携」は問題ありと自己評価していた。自己評価システムを使用することにより、実習期間中の学生の情意領域の状態を把握することができた。このように、学生に問題が生じている場合には早めの対応ができると考えられる。

これらの研究は今後の臨床教育における、実習指導者や学生のための一つの教育指針

と効果的な教育方法になると考えられる.

## 論文審査の結果の要旨

作業療法士養成における臨床実習の問題は、実習成績評価表の情意領域に関する内容の問題、実習指導者による実習指導方法の問題、学生を評価する際の施設間による格差の問題がある。さらに、学生個人の問題や、実習施設と作業療法士養成校との距離の問題などが挙げられている。

そこで、本研究では、作業療法士養成校における臨床実習の問題点を改善する目的で、学生の情意領域に関する自己評価表を作成し、そして、臨床実習中の学生の情意領域を把握する目的で、自己評価表を用いたネットワークによる実習評価システムの開発を行っている。今回の目的を達成するために以下の6段階で本研究を行なっている。

第1段階として、実習指導者と学生の教育目標を一致させる目的で、情意教育に関する70項目からなる自己評価表を作成している。第2段階では、自作した自己評価表を用いて、学内授業のグループ学習が情意領域に対する影響を検討している。第3段階では、第1段階で試作した自己評価表を改定し、総合臨床実習期間内で改善可能な項目や、困難であろうと思われる項目を明確にしている。第4段階では、70項目からなる自己評価の因子構造を明らかにすることと、自己評価表を簡便化する目的で探索的因子分析を行なっている。さらに、因子分析後の実習前と実習後の因子構造の比較により実習前と実習後の学生の意識の変化を示している。第5段階では、臨床実習における学生の情動には、どのような要因が含まれるかを知るために、POMS短縮版と自作した自己評価表を用いて検討している。学生の不安の要素を明確に示している。第6段階では、実習中の状況や学生自身の成長に対して、リアルタイムに自覚を促す機会をとらえるために、実習中の情意領域の自己評価を把握するための実習評価システムの開発を行っている。そして、実習を経験する前の学生の自己評価と、実習を終了した学生の自己評価を調べることで、実習前、実習中、実習後の学生の自己評価を経時的に抽出している。その結果、本研究で構築された実習評価システムは、実習期間中の学生の情意領域の状態を把握することができ、学生に問題が生じている場合には早めの対応が可能であることを示している。

このように、本博士論文の研究は、作業療法士養成のための臨床教育における、実習指導者や学生のための一つの教育指針となり、効果的な教育方法の助けとなることが示唆される。

以上を総合して本審査委員会は、本論文が「博士（応用情報科学）」の学位授与に値する論文であると全員一致により判定した。